

# Il fascino dell'Italia

## percezioni e immagini nel Giappone moderno

岩倉使節団を近代日本における「イタリア発見」の原点に据え、それ以降のイタリア像・イタリア体験記録への流れをたどり、約百年にわたる日本近代文化の中でのイタリアの位置づけを考える。

11:00-12:00

基調講演 Conferenza inaugurale

平川祐弘 (東京大学名誉教授) 「イタリアの発見・イタリアの魅惑 その100年」

HIRAKAWA Sukehiro (Professore emerito, The University of Tokyo): "Il fascino dell'Italia: cento anni di percezioni e immagini"

13:30-14:00

鈴木栄樹 (京都薬科大学) 「1880年代後半における日本人政治家たちのイタリア〈観光〉」

SUZUKI Eiju (Kyoto Pharmaceutical University): "Il turismo italiano dei politici giapponesi alla fine degli anni '80 dell'800"

14:00-14:30

平石典子 (筑波大学) 「イタリア文学を読んだ人、読ませた人—明治日本のイタリア文学」

HIRAISHI Noriko (University of Tsukuba): "La letteratura italiana nel Giappone Meiji: i modi di diffusione e i suoi lettori"

14:30-15:00

末永航 (美術評論家) 「大正教養世代の知識人とイタリアの旅」

SUENAGA Kō (Critico d'arte): "I viaggi in Italia degli intellettuali giapponesi nella prima metà del 900"

15:30-16:00

和田博文 (東洋大学) 「深尾須磨子のイタリア紀行」

WADA Hirofumi (Toyo University): "La poetessa giapponese Fukao Sumako (1888-1974): uno sguardo sull'Italia alla vigilia della seconda guerra mondiale"

16:00-16:30

Reto HOFMANN (Monash University, Australia) : "Shimoi Harukichi and the Cultural Politics of Fascism"

16:30-17:30

ラウンドテーブル・ディスカッション

Tavola rotonda

# イタリアの発見・イタリアの魅惑

シンポジウム

—近代日本におけるイタリア像とその変遷—

2016年10月1日 (土) 11:00-17:30

京都外国語大学 1号館171教室

入場無料 予約不要

お問い合わせ先 イタリア東方学研究所

Tel: 075-751-8132

Email: [iseas@iseas-kyoto.org](mailto:iseas@iseas-kyoto.org)



主催：京都外国語大学、イタリア東方学研究所

後援：イタリア大使館、イタリア文化会館

協賛：東京倶楽部

上：『米歌回覧実記』挿絵銅版画「威尼斯(ヴェネチア)府ノ古政事堂」(久米美術館蔵)

右下：『米歌回覧実記』挿絵銅版画「同側面並ニ「サンマリコ」寺鐘樓」(久米美術館蔵)



日伊国交樹立 150 周年記念事業として両国の公的機関及び民間団体により企画された催しのひとつであるこのシンポジウムでは、特に近代日本におけるイタリア像に焦点を当て、19 世紀半ばから第二次世界大戦終焉までのほぼ百年にわたる近代日本の文化の中で、イタリアの位置付けを考える。

東京・京都でのパネル展「近代日本のイタリア発見—岩倉使節団の記録から—」の開催に合わせて、岩倉使節団を「イタリア発見」の原点に据え、以降、学術的なアプローチで近代日本の一側面に焦点を当てる。イタリア及びイタリア文化の表象やイタリア体験などの言説が 2・3 世代を通していかに受け継がれたかを検証し、イタリア像の流れを様々な立場から浮き彫りにする。洋行体験でイタリアがどのような意味を持ったかを問いながら、旅行記というジャンルによって個人体験の領域を超え読者層が共有する心象を眺めるだけでなく、美術の分野ではどのような魅力が働き、また近代文芸の文脈の中で文学的空間としてのイタリアがどのように記され、受容されたかを紹介する。

以上のテーマを扱った初めての総合的なシンポジウムとして、日本近代史、文学、比較文学、交流史を専門とする 6 名の研究者を招き、京都展のオープニングに合わせて開催される。

### 【基調講演】

平川祐弘「イタリアの発見・イタリアの魅惑 その 100 年」

鈴木栄樹「1880 年代後半における日本人政治家たちのイタリア〈観光〉」

1880 年代後半は、明治憲法の制定（1889 年）、帝国議会開設（1890 年）を控え、また井上馨・大隈重信両外相による条約改正交渉が試みられた時期である。こうした時期に、岩倉使節団派遣の際に実施された西洋諸国の視察について、有力政治家たちによる第 2 の視察の波が訪れる。彼らが残した日記などの関係史資料を通して、とくにイタリア〈観光〉の歴史的意義を紹介したい。

平石典子「イタリア文学を読んだ人、読ませた人—明治日本のイタリア文学」

日本におけるイタリア文学の初期受容を考える際、重要な人物として挙げられることが多いのは、上田敏や森鷗外である。彼らの紹介や翻訳を経て、イタリア文学は日本の知識人たちに広まったわけだが、イタリア語が読めなかった日本の知識人たちは、英・仏・独語経由でイタリア文学に触れていたといえる。本発表では、G. ビゴーが挿絵を描いた『想夫恋：十日物語』（ボッカッチョ原著、1886）やダンテ『神曲』をめぐる演劇や絵画など、日本の知識人たちが触れていた情報に焦点を当て、明治日本のイタリア文学受容について考察したい。

末永 航「大正教養世代の知識人とイタリアの旅」

明治末以降の日本では、近代の第二世代の学歴エリートたちが続々とヨーロッパに留学する。イタリアは主な留学先ではないが、必ず訪れるべき旅行先として重要視されるようになる。ミケランジェロをはじめとするルネサンス美術、ダンテ、アッジジの聖フランチェスコ、鷗外訳『即興詩人』、ダヌンツィオは日本でも必須の教養として受け入れられていた。『白樺』や『三田文学』のメンバー、夏目漱石門下、キリスト教信徒など、若い日本の知識人たちが。近代ツーリズムの勃興期に、イタリアで何を見、何を思ったのか？ 数多く発表された当時の旅行記からイタリア体験の特徴と意味を探してみたい。

和田博文「深尾須磨子のイタリア紀行」

詩人の深尾須磨子は 1939 年 3 月に神戸港で、欧州航路の日本郵船・箱根丸に乗船し、イタリアを中心にヨーロッパを回って、翌年 1 月に帰国した。それは「詩の旅」と称してはいるが、旅のさなかの 9 月に第二次世界大戦が勃発することが象徴するように、時局色を色濃く滲ませた旅でもある。『旅情記』（1940 年、実業之日本社）や新聞記事、さらに雑誌に掲載された多くの写真を媒介に、深尾の視線がイタリア紀行で何を捉えようとしていたのかを明らかにする。

Reto Hofmann: “Shimoi Harukichi and the Cultural Politics of Fascism”

Shimoi Harukichi (1883-1954), the foremost promoter of Italian fascism in Japan, played a peculiar role in the transformation of Japanese knowledge of Italy in the interwar period. In this presentation it will be argued that Shimoi popularized a new discourse of *italianità* in which the image of Italy coincided with the ideology of fascism. Through an examination of his thought and activities, the presentation will show that the Japanese meeting with Italy was, in many ways, an encounter with fascism.

会場：京都外国語大学 1号館171教室  
(四条通り正門よりすぐ左側、1号館7階)

■ 京都外国語大学 交通案内

〒615 - 8558 京都市右京区西院笠目町 6

地下鉄東西線 太秦天神川駅 南へ徒歩約 13 分

阪急京都線 西院駅 西へ徒歩約 15 分、または市バス 3・8・28・29・

67・69・71 系統で約 5 分 京都外大前下車。

JR 京都駅より市バス 28 系統・京都バス 81・83 系統 京都外大前下車

※駐車場はありません

